

# 意見陳述書

陳述人(原告ら代理人弁護士) 斎 藤 利 幸

1 私は、福島県郡山市で弁護士をしておりましたが、原発震災により  
昨年3月15日に、福岡県遠賀郡に難を逃れ、永住を決意しました。

2 (1) 原発の爆発と避難

- ① 3月12日の午後から第1号機爆発という事態に至り、非常に驚きました。この頃、枝野官房長官が「原子炉は安全である。放射性物質は、さほど出ていない」旨説明しており、半信半疑ながらも、避難勧告の指示も半径20kmであり、郡山までは60km近くであったことから、この安全情報を信じてしまいました。
- ② 3月15日、朝5時頃に目が覚め、ネットにつないだところ、原発がメルトダウンしているかもしれない、との情報が飛び込んできました。非常に驚き、「放射性物質が大量に出て来てしまう、直ちに避難しなければならない」と決心し、ほんの身の回りのものをもち、午前7時には飼い犬を連れ、家を出ました。
- ③ 乗った電車の中では、原発の爆発情報が続き、暗澹たる気持ちになり、「もう福島には戻れないだろう」と思い、真っ暗闇に向かって進んでいくような感じがしました。

(2) 生活

こちらに来てからの生活の激変、しかもその原因が原発事故という特殊状況の中で、頭が全く働かないと言う苦しみが始まりました。何をやっても、故郷の原発情報に心がいってしまい、一体どうなるのかという切羽詰まった思いから解放されないです。

通常の災害とあまりにも違います、故郷が生存環境に戻らずに、このまま消滅してしまうのではないかという激しい恐怖心に囚われ、その外のことは、現実感のない夢の中の世界のような感覚に陥ったのです。

3 原発事故の真実—救済は放棄される

- (1) 私が愕然としたのは、国は国民を救わないのだ、ということです。国どころか、県も市も、どこも住民を救わないのです。  
福島県の多くの人々(たとえば福島、郡山、いわきなど)は、放射性物質による土壤汚染濃度が Chernobyl 事故によって避難させら

れた地域と同程度であるにもかかわらず避難させられずに、そのまま放置されている（チェルノブイリでは 18 万 5000 ベクレル/ $m^2$  が「高汚染地域」で、移住権が付与されるが、福島県では、30 万ベクレル/ $m^2$  でも移住対象とされていない）のです。

(2) 事故前の避難の基準は年間 1 ミリシーベルトであったはずです。

福島県民の人口は 200 万人であり、年間 1 ミリシーベルト以下というと、170 万人前後避難させなければなりません。これをやろうとすると、国家の破綻を招くことになるでしょう。結局、事故前の 20 倍の放射線量である、年間 20 ミリシーベルトにあげられて終わりなのです。

(3) 当初、福島の人々は、「本当に危険なら、国や県が救ってくれるはずだ」と固く信じていました。まだ一筋の希望があったのです。

しかし、高放射線量がそのまま続いている今、人々は行政の救いが来ないことを、ひしひしと感じています。最後の希望も断ち切られた、絶対的絶望状態の中に放り込まれているのです。

友人と話す機会がありました。「欲望は何もなくなった、今日無事に生きられればそれでいい。明日以降のことは考えたくない。いつ病気になるかを考えると恐ろしい。」といっていました。

慰めの言葉もありませんでした。頑張れといつても、それは、そのまま高放射線を浴び続けることを意味するのです。

(4) 一番気になるのは、そこに置き去りにされたままの、子供達のことです。

福島の子供は、今年の 3 月の時点で、普通は 0.8% なのに、35.8%、実に平常時の 44.75 倍という、というとんでもない比率で、甲状腺に異常が見られるというデータもあります。

このまま避難させないとなると、福島の子供は病気等に移行し、甚大な健康被害に瀕することになるでしょう。子供だけでなく、大人ですら時間の問題です。

4 私のように自力で避難できる人は非常に恵まれた人なのです。

しかし、60 年間近く住み慣れた故郷を捨てなければならないことが、「恵まれた」といわなければならないのは、とても悲しいことです。

原発事故は、絶望と悲しみ以外、何も生まないです。

昨年、福岡県に避難してきた人を励ます会をして頂きました。そこ

には、津波で甚大な被害を受けた石巻市の人々もいました。その時の会話ですが、「我々はどんなにメチャクチャになっても、いずれ復興できる。福島はそれさえ難しいよね。」と同情されました。

これが原発事故と自然震災の、歴然とした差なのです。

原発事故による被害者の無念さは、絶対に報われることがないのです。そこで頑張ることは、いつ病気になるのかという現実的不安にさいなまれ、又今後発病したものを見ることは、明日は自分の番だろうかと、恐怖しながら生きることを意味することになるのです。

6 福島のこの様な克服することの不可能な不安や恐怖を繰り返さないためには、絶対に原発事故は起こしてはならないのです。最近、原発について国や電力は「絶対的な安全はあり得ない」などと言い出しているようです。

それならば、直ちにやめるべきです。

幸いにして、事故が起きていない今のうちに。

それしか福島の悲劇を避ける方法はないのです。

特に玄海原発は、非常に危険な状態にあるといわれる1号機や、福島で異様な爆発をした3号機と同様の、プルサーマル炉があります。

原発がなくなり、経済はどうなるのだという心配もあります。しかし原発をやめても、電気がすぐになくなるわけでもないのです。経済の多少の減速と、絶対的絶望のどちらを選びますか。

7 福島の原発事故は、原発安全神話に囚われすぎていて、意思的に避けることは出来ませんでした。

しかし、原発の安全神話が崩壊した今、玄海原発は、意思的に、避けることが出来ます。この点を、理性を持って、冷静に、よく考えて頂きたいと思います。せめて福島の原発事故を無駄に終わらせないために。宜しくお願ひ致します。

以上